

金！ 暴力！ TS！！

KBT……IT

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人間の屑（誇張なし）がうっかり勇者に選ばれて世界を救ったり女性化したりする話

目次

## 旅立ち

「つべー……、マジパネエ……」

それは、高貴なる光の輝き。

「え、これ見世物じゃねーの？ 後で金取られる感じの奴？」

その日、オレ達の目の前に舞い降りたその女性は。

「も、もう少しで乳首見えそう……。ゴクリ」

何もかもを包み込むような、柔らかな笑みを浮かべ。

「はじめまして、勇者よ。私はテトラ。女神『テトラ』と申します」

——女神、を名乗った。

それは、祝祭の日。その日もいつも通り、男3人で連るんでナンパ失敗しつつ遊び回っていた。

夕暮れ時。とうとう疲れてその辺に腰を下ろし、買った酒とツマミを広げ駄弁り始めたオレ達の前に、女神を名乗るセクシー衣装の女性が空からゆっくり舞い降りた。

羽衣、と言うのだろうか？ その女性は白い布を体に巻き付けて大事な部分だけを覆い隠したような、エッチな出で立ちだった。

「——女神？」

「ええ。私は、女神と呼ばれる存在です」

しかも、なんか神々しい。こう、キラキラとしている。

言葉にしにくいのだが、神の気配というのだろうか？ 膝まずいて

しまいたくなるような、何かをその女性は持っていた。

「め、女神様、ですか。その、オレ達にいかなる御用なので?」

「ええ。まもなく、世界に闇が蔓延ります。私は、その闇を払う勇者を選定するべく、この場に参上致しました」

「ゆ、勇者!?!」

その女神は、勇者の選定のためにここに来た。間違いなく、そう言った。

「魔王——魔を統べる王が、間もなく復活いたします。私の役目は、その魔王を打倒する者の支援。勇者よ、貴方を導くために私は現れたのです」

「お、おお——」

な、なんて事だ。魔王が復活するだつて?

いや、それは重要じゃない。そこもソコソコ重要ではあるが、大事なのはその次だ。

「勇者……」

そうか。オレは、勇者だったのか。

冒険には危険が付きまとう。悲しいこと、悔しいこと、これくら沢山経験していくだろう。

だが、それは世のため人のため。勇者に選ばれてしまった以上は、オレが頑張らねばならない。

そう言えば、昔から運命に導かれているような節は有った。村のくじ引き大会であっさり1等を引いたり、たまたまオレが一人で散策してた山道に小銭が大量に落ちてたり。

思えば、あれは全て素養だったのだ。オレが、勇者たる素養——

「……っべー!! 俺ってば、勇者だったとかマジ!?!」

……。

その勇者たるオレの隣で、ベストと言うアホが驚愕していた。

お前じゃねーよ。

「おーいベスト。お前何言ってるの？ お前が勇者な訳ねーだろ」  
「村一番のチャラ男で、女遊び大好きな脳ミソ性欲ゴミ野郎の分際でお前は色町に籠ってる」

「はあ!? 何お前ら、喧嘩売ってるの?」

ベストは大層憤慨しているが、何を勘違いしているのだろうか。

この男は、時も場所も選ばずナンパを吹っ掛けて顔面をしばきたおされるアホの中のアホだ。こんな低俗な勇者が居てたまるか。

今すぐ、自分の人間としての器を自覚して恥じ入るべきだろう。

「勇者つつつたら、俺に決まってるんだろ?」

「……あ?」

「は?」

ところが、その勘違い恥知らず野郎は1人ではなかった。なんと、同じくアホ代表のレダまで自分が勇者だと言い出したではないか。

こいつの頭の中はどうなっているのだろうか。

「頭脳明晰、容姿端麗の俺以外に勇者候補とかいねーだろ」

「容姿端麗（笑）」

「容姿端麗ならなんでその年まで童貞なんですかね？ そもそもお前は卑怯なだけで頭悪いだろ」

「はあああ!? こないだカードで惨敗した雑魚どもがよく言うぜ!」

「あれはイカサマしてたろーが!」

「後から何を言おうとと、その時に証明できなきや言い掛かりでしかねえなあ!! この頭プリン野郎が!」

「こんな下衆な勇者が居てたまるか！ お前は自分の人格が破綻しているのに早く気付け人間のクズ!!」

やれやれ。本当に頭がイカれてる。

レダは言わば、人間のクズだ。ゴミカス、恥知らず、ウジ虫の愛称で親しまれているウンチみたいなのヤツだ。

そんな奴が勇者な訳が無いだろうに。

「お前らも本当は気付いているんだろ？ 真の勇者ってのはオレの事だって?」

「えっ」

「それはねーわ」

そんな事言っちゃって、消去法でもほぼ決まりだろ。

「常識的で、頭も良くて、喧嘩も強い。素手勝負でオレに勝てる奴が此処に居るか？」

「おめーみたいなのエロチビが勇者な訳あるか！ あと、本気出せばお前くらい一捻りだからな」

「てかお前が近接職なだけでしょーが！ 遠距離なら俺のボウガンがお前の眉間射ぬくし!？」

「あつそ？ いや、勝負する?」

「てかそもそも、こないだ覗きやらかして留置されてた奴が勇者とか有り得なくね?」

「酒場でセクハラかましますぎて一部の店で出禁くらってる勇者とかいる?」

「うっせーな!! たまたま手が当たっただけだよ!!」

「いや、わざとだったろ」

「違うし。たまたま伸びびをして手を伸ばした先にお尻が置いてあつただけだし。」

まあエロいのは否定しないけど。

「オレが勇者だと言う根拠は、それだけじゃない。お前らに、1つ有名な故事を教えてやろう」

「なんだし?」

まあ、そろそろ決着を付けるか。この愚かなモブキャラ達に、誰か勇者か教えてやろう。

「——英雄、色を好む」

「「——はっ!」」

ま、そう言うことだ。

「確かにラット以上のスケベを、俺は知らないぜ……」

「マジかよ……、このムツツリが勇者ってマジかよ……」

そう。オレは町一番の変態にして、ムツツリ男。

『色欲のラット』とは、すなわちオレの異名なのだ。

「ふ、納得したかお前ら。さあ、女神様、話をしよう。オレは一体何を

すれば良い?」

「あの、その……」

雑魚共を完全論破し、オレは悠然と女神の正面にたった。  
さあ、ドスケベラットの英雄譚の幕開けだ!

「あの、勇者はレダさんです」

「よっしやああああ!!!」

「何故だああああああ!!!」

オレは勇者じゃなかった。なんでや!!

「え、え、え!? この人間の屑が勇者!? 正気か女神様!!」

「うっそだろ、それはねーわ!! こんなんが勇者になるなら、俺は聖人君子になれるわ!!」

勇者扱いされた人間性が破綻しているガチクス野郎は、それはそれは鬱陶しいドヤ顔をオレ達に向けてきた。

「ざまああああ!!! ホレ見ろ、どうだ見ろ、ざまあみろ!! どうだ悔しいかあ!? お前らみたいな何処にでも居る俗物が勇者になれる訳ねーんだよなあ!!」

「うっせえ殺すぞカス!!」

「上等だし、やっちまうぞコラア!!」

なんだコイツ、殺そう。とりあえずぶっ殺して山に埋めよう。

「人選おかしいだろ!! 何でこんなのが勇者なんだよ女神様!!」

「……その。性格はともかく、勇者に選ばれる人間はその闘いの素質による所が大きいのです」

「ほほー、俺は闘いの素養に溢れていると! く、くくくつ!! すまんなあ、悪いなあ、ごめんなあお前ら。俺は勇者として英雄になるらしいわ、お前らみたいなゴミが一瞬でも俺と連るんでいたことを一生誇っていいぞ」

「調子乗りやがってこの屑が!!」

「性格はともかく、って女神様にまで言われてるぞこの人格破綻者!!」  
「木っ端の遠吠えなんぞ聞こえんなあ!! ごめんねえ強くてさあ!!」

調子乗りすぎじゃね? ここでコイツぶっ殺したらオレが勇者と



かにならねーかな？

なるんじゃね？ やる？ マジで殺っちゃう？

「……他のお二人に声をかけたのも、勇者を支える勇者一行としての素養があるからでして、その。出来れば、皆様仲良くしてただけると……」

「え、この糞の引き立て石にならなきゃいけないのオレ達」

「ねーわあ、それはねーわあ。何なら魔王側に仕えることすら考慮だわ」

「えええ！ そ、それは困るのですが！」

「だって、ねえ。勇者がレダって、それなんの冗談だよって話じゃね？」

何ならコイツ、魔王側の尖兵みたいな性格してるじゃん。卑怯汚いは敗者の戯言とか、平気で言う男じゃん。

「その、一端私の話を聞いてくださいますか？」

「それは良いんですけど、女神様」

「先にレダを虐殺してからで構いませんかね、女神様」

「駄目ですよ!? レダさんは、今代の勇者ですよ!? 今はまだ花開いていませんが、後々彼は国一番の戦士として——」

「ほう、なら殺るなら今のうちって事か」

「話を聞いて!?!」

さて、どうやって殺してやろうか。

「……」

「ふ、ふう。と、とりあえず話を聞いてくださいますか？」  
「……うつつ」

とりあえずベストと二人がかりで調子こいてるエセ勇者を殺そうと頑張ったけど、女神様からの何か不思議な加護的なので守られてしまった。

ちくしよう、可愛い女神様に庇われやがって。良い身分だクソが。  
「やれやれ、野蛮な連中ですみませんね女神様。後で勇者たる俺が躡しておきますので」

「は？」

「殺すぞカス」

「レダさんも煽るのをやめてください!! 話が、話が進みませんので！」

「はーい」

たく、しようがねえ。女神様に免じて、黙ってやろう。

「あの、その。間もなく魔王が魔族を統べて、人族の里へ攻めてくるのです」

「それは大変だ」

「私は人族の守護者にして導く女神。迫りくる魔王の脅威に対抗するべく、素養に溢れた人間を一人選んで加護を与え、勇者とすることを決めたのです」

「へー」

「で、その。そこにいらっしやるレダさんが、私の加護と相性が良くてかつ、潜在能力がすさまじいので」

「まーね。才能の塊って訳ね」

「調子乗んなボケ」

「……魔王を倒す、役割をお願いしたいなあ、なんて」

「良いよ!! 任せてください女神様」

「良い訳ねーだろ、辞退しろクズ」

「お前には無理だ、身の程を知れ」

やっぱ黙ってられねえわ。コイツが勇者とか世界が亡ぶわ。

「あの一、レダさんだけでは無く、ベストさんにラットさんのお二人も

素晴らしい才能の持ち主で……」

「だよー」

「そこは自覚してますよ女神様!」

「……この3人が仲が良いのは奇跡だと思い、声をかけたのです」

「F o o、見る目あるぜ女神様」

「惜しむらくは勇者役を間違えてるところかなあ」

「どうか、3人で力を合わせ魔王の脅威を退けては戴けませんか？」

勇者の加護を与えられるのは一人だけなのですが、ここは一つ全員勇者みたいなモノと考えて……」

「ふーん、まあそんな扱いなら良いか」

「レダだけ魔王と相打ちさせて、平和になった世界でオレ達だけ英雄として凱旋とかどうよ」

「ソレ良いじゃん、ラット。そのプラン、D oで行こう」

「ふざけんな死ぬのはテメェらだ」

レダに全部しんどいことやらせて、うまい汁だけオレ達が吸う。まさに完璧なプランだ。

「後、この地上には5人の女神が存在します。それぞれが勇者を選定し、魔王への脅威に立ち向かうべく備えています」

「え、勇者って俺だけじゃねーの？」

「一応、5人の勇者が選ばれます。最終的には、その勇者面々と力を合わせて魔王に相対することになるでしょう」

「そんなにいるなら、他の連中に魔王任せて良くね」

「俺がやらなくても、誰かがやるっしょ」

「美味しいところだけ貰う感じ〜?」

「全員力を合わせて、頑張るんです!! その代わりに、テトラの加護を与えますから」

えー、5人も勇者居るのか。ありがたみがねえなあ。

てか最初から、その勇者5人で旅しとけばよくね。オレやベストの存在意義ある? マジでレダの引き立て役じゃねオレら。

「5人の勇者が合流してパーティ組んだら、俺らってお払い箱?」

「序盤の仲間枠? 旅の後半では戦力として数えられず、雑用押し付

けられる立ち位置になる奴?」

「い、いえ。そうはならないかと思えます」  
「どして?」

「多分、最終決戦までは絶対合流しないと思うので。勇者同士で肩を並べる機会が多いでしょうが、5人が連携を取るのは魔王と相對する時くらいだと思います」

「え、ソレこそ何で? 最初から5人で旅すりゃいいじゃん」

「……そこは、そのう……」

女神さまが言うには、魔王戦まで勇者はパーティを組まないらしい。何でや? と問うと、それは言いづらそうな顔で女神さまは目を逸らした。

何なんだろう。

「…………ごめんなさい。その、人間には関係のない話なのですが……。5人の女神同士、凄く仲が悪くて」

「……はあ」

「実はそもそも、基本的に女神同士って、信者の奪い合いをする関係なんです。で、少しでも自分の信者を増やすべく自分の選定した勇者に活躍させようとアレコレ画策するので……」

「協調性ないんか、女神」

「なんか胡散臭くなってきたな」

「……あうう。そ、その、私は協調路線を毎回押してるんですよ!? セファちゃんとかキノちゃんとかが毎回暴走して……」

「なんか女神も俗物臭がするし」

「一応カルちゃんとかは私と同意見の協調派女神なので、カルちゃんを選んだ勇者さんは貴方たちと好意的に接してくれると思います。ただ、他の女神は多分力を合わせてくれないでしょう……。自分の勇者が活躍することしか考えないと思います」

「人類の危機に、人類を守る女神が既に仲間割れしてるのはどうなんだろう」

「すみません、すみません。それは本当にすみません」

女神も案外、自己中心的なんだな。

最終決戦では協力してくれるっぽいが、それまでは各勇者は女神の売名行為に走りまぐるって訳ね。世知辛い。

「せめて貴方達には、他の勇者と仲良くして貰って魔王を討伐してもらいたいのですが……」

「んー」

「オレ達は別に構わんけど」

「そんな変な女神がいっぱいいるなら、1人くらいまともな勇者も必要だしな」

「まとも……？ レダが、まとも……？」

飛び切りのクズの間違いではないか。この女神の選ぶ勇者が良心粹だとするなら、勇者の良心が一つ減ってしまうぞ。

「危険で過酷な旅になると思います。でも、私なりに精一杯サポートもしますし、導くつもりです」

「はい」

「なのでどうか、貴方達の手で人類を救ってはいただけでないでしょうか？」

「……まあ、良いか」

「俺も良いぜ、上手く活躍できればモテそうだし」

「うん。魔王討伐後は酒池肉林が待ってると思えばまあ」

「金に囲まれて何不自由ない老後を過ごしたい」

「女の子に囲まれて過ごしたい」

「人選、間違ったかなあ？」

魔王討伐で人気者になれたら、きつと入れ食いだぜ。ふへへ。

「……で、では。勇者レダよ、貴方に加護を授けます」

「おっしやこい!!」

「汝は旅に何を望みますか？ 無限の体力、溢れる魔力、強靱な肉体……なんでも、貴方の望むものを1つ言いなさい。私に可能なものであれば、何でも授けましょう」

いよいよレダは、女神さまから勇者としての力を授けられるようだ。

良いなあ。オレもなんか欲しいなあ。

「どうするべ？」

「肉体じゃね？ 生存確率上げる方が大事だと思うが」  
「オレらの中に魔法アタッカーいないし、魔法では？」

レダは、オレ達にどんな加護を貰うか相談してきた。

格闘家のオレ、弓兵のベスト、剣士のレダと魔法アタッカーが居ないのが俺達のネックだ。出来ればレダに魔法剣士的な感じになって欲しいのだが。

「魔法使えねえのは確かに困りそうだよなあ」

「うーん。でも、魔法って面倒くさいんだよなあ。一から暗記していかないと強くなれないらしいし。頭使うのは嫌いだ」

「贅沢言うなよ、魔法貰えよ」

「うーん……」

こいつ、努力するのが嫌いだから魔法習得を渋ってやがる!! マジで勇者の人選考え直した方がいいんじゃないか? コイツただのクズだぞ。

「あ。すつげえ妙案思いついた!!」

「お、何？」

「まあ見てろ。おーい女神様、決まったぜ」

「伺いましょう」

何やら自信満々だが、大丈夫か? 変なこと言いださねえよな。

「仲間をくれ!!」

「仲間、でしようか」

「そう!! 魔法が使える仲間をください!!」

……ほう。

「それは可能なの？」

「え、ええ。新たな仲間を導くくらいであれば出来ますよ」

「腕が良いのを頼むぜ」

「それいいな。人手が増えるのは単純にありがたい」

「女の子!! 女の子って条件付けろレダ!! 野郎4人旅とか絶対嫌だぞオレは!!」

「あ、ソレな。女神様、女の子って条件で頼む」

「は、はあ。ちよつと待ってください、検索します」

それは確かに妙案かもしれない。

むさくるしい男3人の旅が、一気に華やかな旅になるし。今までオレ達の欠点だった魔法アタッカー不在が解消されるし。

一石二鳥じゃないか。

「俺っち、ゆるふわ系が好みでさあ。小柄で童顔な感じの娘をリクエストするしー!」

「オツケー、その条件も追加だぜ女神様」

「えっ。あ、ハイ。頑張ります」

「それでいて無防備!! 人前での着替えとかあんまり気にしない無防備な女の子がいい!! しかも、覗きとかがバレても笑って許してくれる度量の広い子が良い!!」

「あ、ソレも追加で」

「え、えええ……」

「旅に癒しを与えてくれる女の子がいいな、癒し系要素も入れてくれ」  
「そうだな。それでいて身持ちも固く、貞操観念もしっかりしているとなおよい。当然、今まで彼氏ナシのフリーで処女だ」

「それでいて、俺達の馬鹿なノリにも付き合ってくれる女の子とか最高じゃね?」

「うむ。じゃあ今のも全部追加で」

「えええええええ……?」

ぐふふふ。さて、どんな女の子が来るのだろうか。

楽しみだ、楽しみで仕方がない。

「……………」

「まだー?」

「女神様、早くー」

「ちよ、ちよつとお待ちを……」

女神さまがなんか困ってる。ちよつと条件を付けすぎたかもしれない。  
でも、出来れば妥協したくないなあ。どうせなら好みドストライクの女の子が来て欲しいもんだ。

「……、……」

「わくわく」

「ぐふ、ぐふふふ」

まあ、そんな女の子が来ても女の子ってだけで夢が……。

「……あつ。これなら、何とか」

「おっ！」

「来たか!!!」

そしてついに、女神さまが顔を上げた。

見つかったらしい。オレ達の理想の、女パーティメンバーが!!

「では、改めて。勇者レダよ、汝に加護として望み通りの仲間を授けましょう」

「よっしゃ！ かもん!!」

「その代わり、どうか魔王を倒してください、この世界に、人類に明日をもたらしてください。頼みましたよ、レダ……」

「オツケー分かったから早くだせ!!」

「ゆるふわ!!」

「無ー防備!!」

さあ、どんなのが来る？

女神の選んだ女の子だ、それはもうきつと可愛くて素晴らしい……。

——ぐにゃあり。

「……ん？ 女神様、仲間はまだか？」

「いえ、もうそこにいますよ」

今、変な感覚が体を過った。こう、世界がうねるような、気持ちの悪い感覚が。

「いますよって、一体どこに……」

「え、いなくね？」



それだけじゃない。なんか、微妙に背丈が縮んでいるような。ベストやレダが、一回り大きくなったような……？

「——ファツ!?!」

「え、何その声。ラット、どうし……」

「……」

——。胸が、でかくなってる。

「すべての条件に当てはまる女性が居なかったので、この場で作成いたしました」

「ラットオオオオオ!!?」

……は??

「確かに願いはかなえましたよ。では、さようなら……」

「え、ちよつと待って。待って、待てええええ!!」

「ふぎけん!! ふぎけん!! こんなの詐欺だ!!」

「何処がゆるふわ癒し系だああ!! 外見はともかく、ラットに癒し系要素ねえだろ!!」

「ラットさんには回復魔法を使用できるように、知識と魔力を付与しております」

「ちくしよう癒し系になっちまってる!!」

……はああ!?

「えつ、えつ、えつ?」

「クソ、ちくしよう!! お前らが注文つけすぎたからだぞ!! 加入する筈だった美少女魔法使いちゃんを返せ!」

「おめーが全部追加とかいったんだろーが! 女神様、女化ラットは返すから別の女の子連れてきてほしーべ!」

「えつ?」

「加護を授けられるのは、一度のみと決まっています。では、さようなら……」

「待ってばあああああ!」

うっそだろお前。

ちよつと待った、これ元に戻して貰えねえの？ いくら色欲のラツトと言えど、自らが女の子になる願望まではねえよ？

「……」

「……」

「……」

どうするのんこれ。

「ヒュー~~~~っ!!!」

その晩。オレ達は飲んでいた。

「回復術師がいるから二日酔いが怖くないぜ！ 浴びるほど飲んでやるー！」

「おっ可愛いお尻……。 って痛あ!! 女の子同士だぞ、尻くらい触らせろや!!」

「ギャハハハハッ!! ラットは女になつてもラットじゃねえか!!」

女の子になつてしまったと言う現実から目を背けるために、ただひたすらに飲んでいた。

そしてお酒をたっぷり飲んだ結果、

「まあよく考えたら女になるくらいあんまり大したことねえな!! 実質オレが加護もらった様なもんだし!! 勇者って実質オレじゃね？」

「レダぎまあああ!!」

「ほんと無駄な事した、素直に魔法もらつときや良かった！ 女神様のくそつたれ！ 今度会ったときはF●CKしてやる!!」

「良いねえ、ヤッチャウ？　女神様も女だつてことを分からせちゃおう？」

「3人でかかれば勝てるんじゃない？　弱そうだったし！」

「ふっふうー!!」

馬鹿が3人、お酒で完璧に出来上がったのだった。

「あの糞女神、俺達の夢をぶっ壊しやがって。許さん！」

「女にされた恨みを、その女体で返済してもらおうぜ！」

「女神で脱童貞とか豪華過ぎるっしょ！　神様だつて犯してみせるってか！」

その、あんまりなゲス発言を見かねたのだろうか。

「俺達の新たなパーティー名は『Goddess Fuckers』だぜ！」

「足腰立たなくしてやろうぜい!!　ひゃっはー!!」

その屑発言の直後、大きな雷が3人の飲む酒場を隣の大地を焦がし、『これは天罰の予行演習、ウッフ』と嗤う声がどこからともなく聞こえてきたという。